メルロ＝ポンティ「制度化」概念の射程

(1 部自分の論文の自己引用を含んでいます)

１　「制度」institution という言葉のわかりにくさ（翻訳しにくさ）について

1. 制度、機構、団体、（法人）組織、機関（司法制度、医療機関、金融機関・・）
2. （法律、慣習などによって確立された）体制、国政（民主制）
3. （制度、規則、組織などの）設立、制定、確立。（グレゴリオ暦の制定）
4. 慣習、しきたり（できてしまっているもの）、establishment「物乞いは institution そのものだ」
5. 模範となるようなカリスマ的人物
6. 教育、育成
7. 聖職への叙任（institution canonique）

・客観性（ヘーゲルが法哲学のいう「客観的精神」）
・人為性（自然性に対立）
・　「存在し得ないことがありえなかったなにものか」として、すでに私たちの回りに「自明」なものとして「沈殿」（メルロ＝ポンティ）しているもの
・　なんらかの「起源」を後から問題にしうるもの（創設）
・　規則や手続をともなうもの
・　人間と人間の「間」にあるもの（相互主観性）

具体例

婚姻、出生届、性差別主義、契約、賃金労働、握手（習慣）、保険制度、軍隊、大統領制、民主制、休暇、大学に通うこと、企業、専門分野、投票・・（河野勝『制度』東大出版会）
さらにメルロ＝ポンティの場合では・・・
言語、刷り込み、エディプスコンプレックス、一目惚れ（ある愛し方のパターン：プルースト）、遠近法とその変容、画家のスタイル、数学的真理（イデア的な意味）、親族関係（レヴィ＝ストロース）

以上から・・（河野前掲書による）

１）　制度がわたしたちのさまざまな「行為」の領域において横断的に見出されること（心理・情動的な次元、習慣、政治制度、経済制度）。
２）　マックス・ヴェーバーにおける政治的なもの、経済的なもの、倫理的なものの絡み合い

（それをメルロ＝ポンティは「象徴的母型」と呼ぶ。）

３）　公的なもの・私的なものの区別には関係がなく、むしろそれらを媒介するものである。

４）　すくなくともはじめは人為的に作られたものであるが、ほとんど生物的な「パターン」のことも指す

５）　ある場所、ある時間において機能する地域的・歴史的な「真理」（フーコーの「真理の体制」）：持続的であると同時に可変的

６）　創造的であると同時に惰性として機能することもある・・

河野による二つの定義

１）「アクターの行動に課されるパターン化された制約」（経済学的――自由主義的、新自由主義的――経済学の立場。ゲーム理論の適用：「制度はゲームの均衡である」。どちらかというと変化を強調。（cf. フーコーの「（新）自由主義論」）

２）「アクターの現実理解や行動を意味づけるもの」デュルケム以来の「社会学派」、デュルケム、モース、レヴィ＝ストロース、ウェブレン、ソシュール。持続性（慣習化、儀式化、「モノ」としての「社会的なもの」）。

Cf. サール

「規制的制度」（行為を規制するもの）交通法規など。車がぶつかりあっていくうちにできてくる・・（競争社会）

「構成的制度」（行為の新しい形式を創造し定義するようなもの）チェス。そもそもコマの意味を決めなければゲームは始まらないが、ひとたび始まれば「自由」に動かせる。

メルロ＝ポンティの定義(プリント参照)

「それゆえ、ここで私たちが制度化ということで考えているのは、

- 経験の出来事である。
- この出来事が、持続的な次元を経験に付与してくれる。
- この次元との関係で、
  - 一連の別の出来事が意味（sens）を持つことになる。
  - 思考可能な系列あるいは歴史を形作る。
- 自己の内に、ある意味を沈殿させてくれるような出来事。
- この意味は、生き残りや残滓としてではなく、後続への呼びかけ、未来を要請するものとして沈殿する。（44）

この定義の特徴

１）＜規則のパターン化＞と＜行動の意味づけ＞、＜規制的＞と＜構成的＞という両面を合わせ持つものである。創設的な出来事でもあり、意味付けするものでもある。

２）私たちの経験と行為に関るものである。

３）「意味」（sense. フランス語では「方向」も意味する）

1） 諸経験の「差異」にかかわる。

2） それが諸経験の「系列」を繋ぎ止めるものとなる。

3） それはたんなる「生き残り」ではなく、未来の経験を呼び求めるものである。Cf. ＜同じもの＞であると同時に、＜異なったもの＞、＜異なったもの＞であるからこそ、＜同じもの＞を新たに再活性化したものとしてあるようなもの。

4） 例）芸術的な創造の過程（46)。「ある意味では、絵画の最初のものが未来の果てまで歩み尽くしてしまった。たとえいかなる絵画も＜絵画そのもの＞を完成せず、いかなる作品も絶対的な意味で仕上げられるということはないとしても、それぞれの創作は他のあらゆる作品を変え、変質させ、明らかにし、深め、確かなものにし、作り直し、前もって作り出すことになる」(『眼と精神』末尾)。パノフスキーの『象徴形式としての遠近法』参照)。

5） 「系列（セリー)」という考え方。構造主義の影響。「モースからレヴィ＝ストロースへ」という論文では「浮遊するシニフィアン」という考えが＜制度化＞する要素として記述されている。

6） cf. Deleuze の構造主義論『意味の論理学』第八のセリー

構造には、「シニフィアン」のセリーと「シニフィエ」のセリーという二つの異質なセリーが必要であるということ。(二) これらのセリーのそれぞれは、相互的な関係でしか存在しない諸項によって構成されていること。(三) 二つのセリーは、ある「逆説的な要素」において収斂し、この要素がそれらを∧分化＝差異化させるもの(différenciant)∨であるということ。

- 出来事と歴史の関係における主体性の特異な位置を見きわめること
- 「脱全体化される全体化」「特異性の反復」「切断であると同時に結合させるもの」
- いかなる「類似」もなしに、諸差異の差異を関係付けること（カップリング、内的な共振、強度＝内包性)「たえずみずからにおいて移動し、諸系列においてみずからを偽装する」。「異なった強度の間で電光が発する。だがそれは目に見えず、感じられることもない暗き

先触れに先立たれている。それこそが、凹みのようなものとして、その転倒した道筋を決定しているのだ。(中略) 二つの異質なセリー、二つの差異が与えられたとき、先触れは諸差異を∧分化＝差異化させるもの∨として振る舞うのだ。」(DR 157/一八八)

メルロ＝ポンティにとっての制度化概念の意義。

経験主義（ばらばらな出来事を前提）と観念論（過去と他者において、意味を「構成する」主体）の対立の乗り越え（43–44)。

(ア) 意識を他のパースペクティヴに投げ返す

(イ) 意識と対象との交換や運動

(ウ) 他者はたんなる自己の否定ではない。(サルトルの「まなざし論」批判)

(エ) 制度化されたものは、「蝶番」(＝「逆接的要素」) のように、他者たちと私の間、私と私自身の間にある。

(オ) 自己と他者との鏡像的な関係を実現するもの。自己はそこでは「見られる身体」として現れるが、否定されたり無化されたりすることもなく、他者と共振する。自己でもあり他者でもあるようなものとの鏡像的関係。

Cf.

(ア) 「私たち自身の生の諸要素の脱中心化と再中心化とが同時に起きる」(システムの脱臼)

(イ) 『見えるものと見えないもの』におけるキアスム（交差配列）の思想。

(ウ) 「われわれははじめは概略的に、見る者と見えるもの、触れるものと触れられるものの反転可能性（réversibilité）という言い方をしておいた。今や問題は、つねに切迫すると同時に決して実際には実現されることのない反転可能性にあるのだ、ということを強調すべき時である。私の左手はつねにモノに触れつつある右手に触れそうになっているが、しかし私が合致に達することはけっしてない。((中略)（しかしこれは）失敗（挫折）ではない。実際、これらの経験がけっして正確には重なり合わず、それらが互いに重なり合う瞬間を逸し、それらの経験の間に「ぶれ」や「隔たり」が生ずるのは、まさしく二本の手が同じ身体の部分をなしているからであり、私の身体が世界の中で動き、私が自分の声を内からも外からも聞いているからなのだ。私はこれらの経験の一方が他方に移行し、変身（metamorphose）するのを、それも自分の好きなだけ何度も体験しており、それもただ、まるでそれらの経験の間に、ある丈夫でしっかりとした

蝶番が私には決定的に隠されているとでもいった具合である）（『見えるものと見えないもの』邦訳 205）。

① ポロシティ（多孔性）の存在、

② 自己と他者との間の切断面＝接触面、

③ みずからの身体を内側から感じるということが他者経験の条件であること、他者に見られることこそがみずからの身体を内側から感じると言うことであること。この接触面の「蝕知」の可能性。それはみずから動く身体がその場で「表現する」ものである（知覚＝運動）。（フランシスコ・ベーコンのねじれる身体）。蝶番＝運動という見えないものを支えるもの。

④ 可視性の過剰。可視的な世界は「欠如」に支えられているのではない（「真空恐怖」）。自己と他者、自己と自己との間の接触面＝非差異＝無意識が、感覚的な肌理として身体に刻まれている

⑤ メルロ＝ポンティはこのような事態を「根源的ナルシシズム」と呼ぶが、この身体の「肉」は、みずからを支えるものをみずから作り出しながら行為する身体である。特異性の反復。

⑥ ドゥルーズ：「肉は軟らかすぎる」。→制度化された蝶番こそがメルロ＝ポンティ思想の可能性？　言語行為と差異としての意味・・・

制度化という現象の４つの次元。

（ア）情動の制度化。プルーストにおける愛と嫉妬の描写を読むと、愛する他者なるものは所詮自己の想像的な分身にすぎないように思われる。「純粋な愛は不可能である」（サルトル）「不可能なものは生起する」（45）。他者は、距離を孕んだ存在として自己に体内化されている。この体内化された接触面の自己増殖と自己変容こそが情動である。

（イ）芸術における問題：例）「奥行き」の表現（「奥行きは第一の次元である」）をめぐる画家たちの模索。遠近法の発明：逆行（中世の「非科学的」遠近法への回帰）と飛躍を孕んだ「問いかけ」の連鎖の「制度化」の過程。回顧的な視点ではなく、その場における画家の問いかけ、自己と自己との関係における変容。

（ウ）数学的理念性の制度化。デリダがエクリチュールと呼ぶものを、過去と未来、受動と能動の絡み合いとしてのパロールとして取り上げ直す。デリダ「すべての言語は遺言的である」（『声と現象』）。メルロ＝ポンティ：パロールという、危険をはらんだ「問いかけ」の言語によって制度化される。言語という制度の生。フーコーのパレーシアとの関係。

(エ) 歴史における制度化。

歴史を象徴システムの複合体として捉える。未完結で開かれた意味の網目において、歴史的な出来事の細部（偶然性）が意味を持ち、記号となる過程を追跡。

マックス・ヴェーバーの影響：経済、宗教、法などの諸次元が絡み合う「象徴的マトリックス」

「社会的なもの」の内的なダイナミズムの研究。

「モースからレヴィ＝ストロースへ」（『シーニュ』所収）

制度化としての「贈与」。

（１）モースは社会的なものをシンボリズムとして捉えたことを評価。

シンボリズム：モースは「私たちが社会的歴史的世界と一種の循環関係にあることを理解させてくれた。人間はみずからにたいして中心から外れているのであり、社会的なものは人間においてのみおのれの中心を見出す」（S, 155/1-198)。個人と社会が互の中心をずらしながら絡み合う場をシンボル化の場とみなす。

（２）マナ（贈与者の魔術的・宗教的・霊的な力)、ハウ（事物のエスプリ)。

レヴィ＝ストロース：象徴的思考の総合作用を示すもの。シニフィアンの系列とシニフィエの系列のずれ。

メルロ＝ポンティはこの「ずれ」に肯定的な意義を与え、象徴的システムそのものの意味の生成過程に注目。

> マナはまさに、個人が与え、受け取り、返すものの間にあるある種の等価関係の明証性であり、個人自身と、他者たちとの制度的な均衡状態の間のある種の偏差の経験、振る舞いが自己と他者を二重に参照するという第一の事実、個人自身と他者を交換可能な要素とみなすような、ある見えない全体性の要請なのではないか（S, 145-146/1-187)。

- 「等価関係」における「偏差」の経験
- 行為は、自己と他者へ二重に参照する。
- そこにおいて「見えない全体性」（社会的なもの）が作動している。それはつねに私たちの行為において「到来しつつある」全体性であり、行為の場とそこで交わされるモノと結びついたローカルで有限なシステムである。限定されていると同時に開かれており、その諸要素が物質的であると同時に意味を持つようなシステム。「モノとしての言語」
- 「象徴としての贈与」ではなく「象徴における贈与」という見えないものの到来。

・　浮遊するシニフィアン：「なにも分節しないが、可能な意味の領野を切り開く」（s, 188）。
・　贈与という出来事は、「持っていないものを与える贈与」（ip、101）。
・

→　このようにメルロ＝ポンティは、社会的な制度が「象徴的システム」であることを認めた上で、それを「開かれた有限なシステム」の創設に注目。そこで明るみに出るのが、不均衡の到来という出来事であり、モノとしての言語、モノとしての象徴という考え方である。それを読み解くためには、社会学的な外からの視点ではなく、また当事者の視点のみではない。むしろ当事者の視点や「感覚」を「意味」へともたらしていくような作業であろう。私たちはこの「モノ＝象徴」を交わしあうという行為において、自己と他者とに二重に関係している。

野生の世界へ

このようなさまざまな制度が絡み合う世界のことをメルロ＝ポンティは「野生の世界」と呼ぶ。野生の世界とはメルロ＝ポンティによれば、以下のような（セザンヌの絵画のような）世界である。

> 事物がそこにあるのは、ルネサンスの遠近法のように、投影的（プロジェクティフ）な見かけやパノラマの要請に従ってではなく、反対に、屹立し、固執し(insistant)、その稜線で視線を削り取ること（écorcher　le regard de leurs arêtes）によってであり、ひとつひとつが、他の事物と共不可能な（incompossible）絶対的な現前を要求するが、その「純理論的な意味」が観念を与えてくれないような、布置の意味のおかげですべてがともにある[i]。

・　私たちの視線がぶつかるエッジ。その暴力性。モノたちの共不可能的な現前と共存（「同時性」）
・　その「意味」（布置の意味）を制度化するためには、視線は可能なかぎり風景の起伏をたどることが必要である。
・　エッジは＜予想不可能なもの＞の現れをともなう、一種暴力的な経験たりうる。だがその代価を払ってのみ、「同時性」は可能になる。
・　布置の意味が到来するとき、身体は受動でもないし、能動でもない。停止しているが、力のせめぎ合いを身に受けている。
・　このような受動性は、「あらゆる受動性より受動的」であると同時に、それによって「あらゆる能動性より能動的なもの」(新たな意味の創出)の可能性でもある。「制度化されたもの」と「制度化する主体」との関係

・　「感覚〔の特異性〕を通してしか与えられないが、その彼方にあるような何ものか」
・　このような受動性をメルロ＝ポンティは「側面的な受動性」と呼ぶ。それは「傷つきうる意識」の受動性であると同時に「制作する意識」でもある。（スティーヴン・ホールの「キアズマ美術館」）
・　マチスの筆の動き（プリント）

○他者の制度化、他者による制度化、他者との制度化：

したがって制度において、他者との関係は、自己によって構成される意味の関係でもなく、サルトル的な相剋や否定の関係でもないし、ラカン的な外部のまなざしやレヴィナス的な大文字の「他者」でもない。メルロ=ポンティがしばしば、自己と他者との関係を、鏡像的な関係として提示することはよく知られているが、それはたんにうつしうつしあうような穏やかな関係ではなく、愛や暴力を孕んだ相互的な侵蝕として描き出されている。

> ［他人とは］構成されたもの一構成するもの、すなわち私の否定ではなく、制度化されたもの一制度化するものである。すなわち、私は他人に自己を投企し、他人は私に投企するのであり、投影と体内化の関係があり、私が他人においてなすことと、他人が私においてなすことの生産性があり、側面的な引き込みによるコミュニケーションがあるのだ。これは相互主観的ないしは象徴的な領野であり、文化的諸対象の領野である。これこそが私たちの環境、蝶番、接合点である――主体と客体の交代ではなくて（IP，37．傍点筆者）。

・制度的な領野は、自己と他者の共存の領野である。しかしながら、この共存はどこかにすでに与えられているものではなく、また統整的理念として定立されるものでもなく、そのつどその場において作り出されなければならない。またそれは、たんに平和的な合意や相互承認の地平ではなく、むしろ自己が他人に引き込まれ、他人が自己に引き込まれるような、緊張を孕んだ場であり、相互の行為の誘導、さらには潜在的な攻撃性をも含んでいる。
・しかしこの相互誘導や攻撃性は、「生産性」すなわち制度的な「意味」を新たに沈殿させるものでもある。この「意味」は、まさに自他の相互関係の交差点において結晶化する。というよりはむしろ、自他と呼ばれているものは、この意味が結晶化してはじめて、事後的に創設される。というのは、「意味」は、潜在的な暴力をはらんだコミュニケーションの過程において、自己にとっても他者にとっても予期することができなかったものとして、ふと生まれてくるからだ。そのときこそひとは、真に「何かが語られた」「何かが思考された」という経験を持つ。

マリヴォーの言葉を聞こう。「私はあなたのことをコケットと呼んだりするとは思わなかった。それは、夢にも思わないうちに、ふと言われてしまったことなのだ。」誰によって言われたのか。誰に対して言われたのか。それは精神によって、精神に対してではなく、身体と言語を備えた存在によって、身体と言語を備えた存在に対してである。そのいずれもが、あたかもマリオネットを操っている者たちのように、相手を見えない糸で引き、相手を語らせ、思考させ、そうあるべきもの、ひとりではけっしてなりえないものへと生成させる。こうして事物は、あたかも私たちが所有するのではなく、私たちを所有するような＜言葉＞や＜思考＞によるかのようにして、ふと言われ、ふと思考されるのだ（S, 27)。

「ふと言われ」「ふと思考される」(se trouver dit, se trouver pensé／happen to be said, thought)もの、それは二つの存在の間において、「事物の言葉」(VI, 168)として――すなわち「沈黙の声」の呼びかけとして――生まれてくるような超越的な意味である。

それは、既成のコミュニケーションのシステムにおいては場を持たないような、ある種の空虚として現れるという意味では「沈黙」であるが、ひとたび語られ、思考されてしまったならば、けっして忘れられることなく、どこかに残り続けることだろう。それは「私」でも「あなた」でもない、誰の言葉でもないような＜言葉＞の意味である。だからこそ、そしてその意味でのみ、それはたんなる沈黙ではなく、「事物の言葉」なのである。

だがもしそれを二人がこの言葉にともに貫かれ、ともに取り上げ直すとき、それは「共通の意味」(VI, 125) として結晶化し、両者の「共存のスタイル」(IP, 121)を変容させることだろう。さらには、両者の存在そのものをも変容させることだろう。新たな語りやコミュニケーションの獲得には、つねにこのような「事物の言葉」の沈黙が介在するのである。

「制度」と呼ばれるものは、このような共同的な世界の意味の同時生起の場であり、「共通の意味」の沈殿の場であり、そしてコミュニケーションのシステムとその変容の場である。「語ること」や「思考すること」は、概念や意識としてではなく、協働的な（ガタリ的な用語で言えば「集団的」な）発話行為のスタイルとして記述されなければならない。

・この制度の媒介的な作用のことを、メルロ=ポンティは「斜行的」コミュニケーション、「斜行的」意味として記述する。それは自己と他者という主体のイニシアティブに依存して発生するものではなく、むしろ「制度の制度に対する問いかけ」として自己媒介的に生まれてくる。

だからこそ自己と他者は、「自己破壊」(VI, 124) の危険を冒しながらも、それをともに取り上げ直すことで、両者のコミュニケーション的な行為のシステムを変容させるような「語る言葉(parole parlante)」(VI, 168) すなわち「制度化する言葉 (parole instituante)」を、ふと発することになるのである。

> 他者たちもそこにいて(彼らは事物の同時性とともにすでにそこにいたのだが)、それははまずは精神としてではなく、「心的活動」としてでもなく、怒りや愛においてであるような他者たち、すなわち、その顔付きや仕草や言葉などであって、それらは、思考が介在することなしに、私たちの顔付きや仕草や言葉に応答するのであって――、私たちは他者たちの言葉を、それが私たちに到達する以前に、突き返してしまうこともあるほどなのである。それは私たちが理解していたのと同じくらいに確かなもの、いやそれ以上に確かなものである。私たちのひとりひとりが他者たちを胚胎し、ひとりひとりの身体において、他者たちによって確証されているのだ (S 228/二一三八)

メルロ=ポンティが目指しているのは、こうした自他の鏡像的で想像的(イマジネール)な関係が、その関係そのもののうちに異他性をはらみ、それが無限の反照関係において増幅され、みずから複数化していく過程を追跡していくことである。こうして「根源的なナルシシズム」(VI, 187/一九三)は、おのずから外部に対して開かれ、新たな共存のシステムを創出する。「制度」とはまさに、このようなナルシスズムの内的な複数化の「媒体 (milieu)」なのである (IP 35)。

・他者との共存は、制度においてたえず制度化されなければならない。そしてそのような他者は、いきなり自己を暴力的に否定したり、誘惑したり、籠絡したりする他者であることもあるだろう。私たちは、そうした暴力が私たちに到達する以前に先取りし、みずからの身体によって、それらを模倣する。言いかえるならば、自己の幻影との争いにかぎりなく近いような行為、自己への暴力にかぎりなく近いような行為の反復が、いつしかみずからのうちに他性をはらみ、幻影的な他者の「歓待」ともなり、それまでの行為のスタイルが「他」の行為のスタイルへと変容していくこと、このようなことを可能にしてくれるのが「制度」なのである。したがって「制度」とは、たんに独断論的に前提される無意識的・社会的な共存関係でも、またたんなる経験的な暴力の場でもなく、むしろそうした「無意識的共存」と「経験的な抗争」の共通の源をなすような場を指し示しているのである。

またクロード・シモンの小説を分析しながら、メルロ＝ポンティは次のようにも言っている。

通過した道には、到着点の遠近法には隠された木々が含まれているように、時間に繋ぎ止められた諸現在は、唯一の視点において両立するものではない。したがって、ひとつの現在を開くことによって、その背後には別の現在が見出され、新たな現在を破裂させる。入れ子状の現在である。さらにそこに含まれる過去は、この現在の中心をずらすような、別の世界である。時間の同時性とはこのようなものだ。共不可能な諸現在が同時性において共存する（NC, 207)。

外傷の現象学（ベルネ）

外傷の現象学とは「主体がどのようにして、まったく概念化できないが、不可避のものとして関係してくるような、何かの現れを統握できるのか」。その何かは、主体にとって異質であるような「不可能なもの」として到来するにもかかわらず、その主体のみにかかわる特異性として経験されるのである。

だがこれもベルネが示唆するように、外傷的経験の記述だけではなく、さらに主体が「外傷を受けうるもの」であること、すなわちそのような経験が主体の制度化の契機であるということを示すためには、レヴィナスのように、主体が他人による呼びかけに先取られているという状況や、そこにおける倫理を持ち出すのではなく[ii]、主体が「不可能なもの」を自己固有化しようとする不可能な行為そのものを主題化し、「主体とトラウマ、志向的な意識と他者性の出来事、私の享楽と他者の苦しみ」の時間的な一致なき「同時性」を問題にしなければならない。外傷的な出来事は、私たちがまさにそれを新たに自己固有化しようとするかぎりにおいて、そのような行為の裏面として、経験され続けるからである。したがってトラウマとは、特異な主体を人質とするような異質な他者性という出来事であるばかりではなく、<他>と<自>が交互に、すなわち交差配列（キアスム）状に前面化するような出来事でもあるのである[iii]。

受動性の問題

以上は「制度化されたもの」がどのような行為のフィールドをなしているか、という話である。では「制度化する主体」の特異性はどのように語ればよいのだろうか。

無意識は第二の「我思う」ではない。無意識とは「象徴的マトリックスの出来事的な発生」すなわち制度化そのものである。外傷的な経験が行為のパターンを決めてしまうことがある。出来事と象徴的な制度は内的に結びついている。

フロイトのいう「不滅の過去」（それ自体で保存され、強迫的に反復されてしまう過去の圧力)。「偶然の出来事」であったのに「ありえないことがありえないこと」として回帰する。「それ自身の内に近くされたという要請を含んでいるような過去」

ドゥルーズ:「潜在的多様体」(virtuality)。過去に一挙に身を置くという「飛躍」。「忘却はみずからを忘却する」
メルロ＝ポンティはむしろドゥルーズのように潜在性を自律した実態として語ってしまうことを避ける。だがこのような過去について、実存論的なスタイルで語ることもできない。
「不滅の過去」と「現在」の同時性をどのように語ればいいのか

> 同一性としての（空間的ないし時間的）事物から、差異としての、つまり超越としての、つまり、つねに「背後にあり」、彼方にあり、遠くにあるものとしての事物へ移行することなのだ。――現在そのものも、超越を含まない絶対的一致ではない。〈原体験 Urerlebnis〉が含んでいるものでさえ、全面的一致ではなく部分的一致なのである(VI, 249/二七七)。
> 何だかわからないような、欠如と欠落の知覚がある。欠如の知覚はたんなる知覚の欠如ではない→一般化しよう。何ものかの知覚は、具体的な知覚作用のたんなる現前ではない。いずれにおいても、局部的な意識である。すなわち、否定的な知覚は肯定的な全体性によって裏打ち（doublé）されており、いずれにせよそれは、そのスタイルによって知られるような、ある全体に対する欠落ないしは偏差なのである。(IP, 264)
> 知覚はつねに今ここにあり、部分的であり、局地的な出来事である――しかしながらそれは、超越的な意味を隠し、結晶化させるのであり、この超越的な意味が、事物そのものの彼方へと私たちを引き入れるのである（IP, 265)。
> 「差異の体系」としての構造は、たんに否定的な関係の総体ではなく、むしろ否定と肯定、知覚と非知覚の対立の彼方において、「無ではないもの」を「何かあるもの」として到来させるような場であると考えられる。
> そしてこの「無ではないもの」は、その都度なんらかの個体性を持ちつつも、他の個体とその場において関係し、潜在的なシステムを呼び起こす。たとえば「赤」という色が、個体性を保ちながら、しらずしらずのうちに包囲光となり、ひとつの「次元」となるように、「無ではないもの」は「それ自身の持続によって」変容し、一種の普遍性を獲得する。そのように、個体的な事実と理念的な構造体の間の次元においてみずから作動し、そこに「超意味」として沈殿する「本質」のことを、彼は「動詞的な意味における本質 Wesen」「生き生きとして能動的な本質」などと呼ぶだろう。このような本質は、理念的な意味やその構造に端的に対立するものではなく、むしろ理念的構造の「回転軸」「継ぎ目」として、横断的に理念的構造体を支えている（VI, 153-154/一五九)。

哲学は、実在論のように、実在的な諸要素との接触から始めるのでもなく、観念論のように、そこに理念化の働きを見出すことを目指すのでもない。それが見きわめなければならないのは、存在と無の分節化すなわち、「無ではない」何ものかの到来をしるすような、特異な出来事である。この出来事は、個体と本質、部分と全体、そして「先取り」と「(部分的) 取り上げ直し」の循環を創設するような出来事であるが、同時に両者の間に乗り越えがたい深淵を穿つ。哲学はいわばこの深淵を「跨ぎ越す (enjamber)」(*Id.*)ことによって、過去そのもの、世界そのものへと関係しなければならない。
それが深淵であるのは、過去や世界などの超越が、いわば「無意識の」システムをかたちづくり、取り返しのつかないものとして与えられているからである。哲学にとって可能なのは、そこに「痕跡の形でしか残っていない」が、機能し続けているような、「規則的諸関係」ないしは「構造的な法則」(VI, 136/一四〇) を蘇らせることにほかならない。そのことによって過去や世界の創設 (Stiftung) との側面的な関係を継続し[iv]、過去や世界について証言する「主体」としてみずからを制度化するのである。

> 記憶とは忘却の反対物ではなく、真の記憶は両者の交差点、忘却によって忘れられ、保持される記憶 (le souvenir oublié et gardé par l'oubli) が回帰する瞬間にある。明白な記憶と忘却とは、過去との側面的な関係の二様態であり、その過去は、それが残すある限定された空虚としてしか現前しない (RC, 72、傍点筆者)。

「ある限定された空虚」とは、「無ではない」ような「何ものか」として現れるもの、ある全体性からの偏差として現れるような過去のことである。この過去との側面的な関係こそが根源的である。この関係が、あるときは「忘却」として、あるときは「明白な記憶」として現れる。「忘却によって忘れられ、保持される記憶」とはそのような過去の記憶であろう。したがって、過去が「ある限定された空虚」として現前するのがほんとうだとしても、この一種の「否定性」は、それ自体の持続において二重化し、襞を形作っているような否定性である。

だがまさにこの場において、身体はみずからに働きかけることによって、みずから新たな身体システムを立ち上げていかなくてはならない。そうして「ある限定された空虚」を実現することによって、身体を遠隔操作するようなものを統御し、自由にみずからを動かすことができるようなシステムを制度化しなければならない。言いかえるならば身体は、「ある限定された空虚」を回転軸として外部に引き込まれながら、内部においてこの空虚を実現することで、はじめて主体として制度化する[v]。このように、いわば「内部の外部」と「外部の内部」を側面的に結合

するような行為において、身体図式は創設される。このような行為においてこそ、内部と外部の新たな関係、新たな「回転軸」が創設される。同じように「ある限定された空虚」として現前し、私たちを引きずり込む過去も、「真の記憶」という行為において実現されるのである。
こうして身体は、内部と外部、そして過去と現在の「深淵」を跨ぎ越す。ただしこの「深淵」は、絶対的な空虚や、根拠の不在ではなく、むしろ身体が行為を継続するために、みずからの根拠をみずから創設するような、垂直的な場を指し示している。すなわち、身体的主体は、みずからの行為を継続しようとしながら、みずからに対する障害を体内化しつつ、それを「跨ぎ越す」ようなシステムを創設することによって、はじめて主体としてみずからを「制度化」するものである。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

三　自然と存在論

『自然』講義からの引用：

否定的なものと肯定的なものの絡み合いの「場」「存在論的風景」
これは「生命原理」のようなものや「環境」の問題とどう関係するのか。
ケーシーはエッジから、エコロジカルな政治学を展開。

１　動物行動のスタイルの制度化

動物の行動の発達。コグヒル。両生類の例：泳ぎから陸上歩行へ。部分的反応と全体的な行動を組み合わせながら、環境に適応した行動のかたちを動的に組織していく。
このような例は「成長の内的なポテンシャルや、環境に有機体のごとくに反応するダイナミックなシステム」があるのではないかと想定させる（自己規制的なシステムが、環境における課題を、ゆらぎながら解決していく）。
行動は一種のポテンシャルとして、発達を導いていく。それは「未来へのレフェランス」を孕んでいる。「有機体とは、未来における行動と同義である」（NA, 198）。「生物学的な組織の諸段階は、有機体が果たす課題を素描している」（190）。
これは生気論ではない。「行動は反物理的ではないが、物理的なものとは違うもの」（NA, 300）。物理的なプロセスには還元されない行動の「意味」を語ることができる。物理的であると同時に意味であるようなものが「行動」。

２　脱中心化のシステムとしての生

二つの誤謬：
１）生は解剖学的な諸部分の加算ではない。

２）だがドリーシュの生気論のいうようなエンテレキーを positive な原理として想定することもできない。生のポテンシャルを実体化しない。

３）メルロ＝ポンティ：生は「否定的な原理」である。行動の発達において、生体の内部と外部の「襞」として、発達を調整する。「動物の発達はどのような船にも結びついていない純粋な航跡のようなものだ」。

４）あるシステムが、ある環境において作動不能になるとき、システム内にある種の「不均衡」が生じる。それによって有機体はそれまでの位相にはとどまれなくなる。そこで新たな「行動のスタイル」の発明が要求され、身体的な発達はそれを追いかけるようにして進んでいく。だから「行動のスタイル」は一種の生命のポテンシャルだが、１）新たな行動の現実的な発明という飛躍を前提とする（２）それは遡行的にしかポテンシャルと言われることはできない。→　物質の惰性に依存する「有限なエラン・ヴィタル」。

５）「内在的な合目的性」と「物質の惰性」、「相対的な均衡」と「(事後的には創造的な）不均衡」という両面を備えた両義的なプロセス。物質プラス生命原理という考え方ではうまくいかない。カオスと形式化、質料と形相、生物学的合目的性と物理的因果性の対立を乗り越えること。

(1) 否定的原理とは、自己との同一性であるというよりは、自己との非差異である。この不在が要因となるのは、自己自身の否定性の否定によってにすぎない。それは生物における多の統一であるというよりは、多の諸要素の間の癒着である。ある意味では多しかない。そして、発生する全体性は、潜在的な全体性ではなく、ある種の次元の創設なのだ（NA, 208）

(2) 有機体であろうと動物社会であろうと、問題になるのは不安定でダイナミックな均衡である。そこにおいては、乗り越えはすべて、すでにある活動を取り上げ直し、それを脱中心化することによって変形するのだ。そこから特に結論として言えることは、種相互および種と人間の関係を階層的に考えるべきではないということだ。

(3) 生とは分離可能な事物ではなく、囲い込み＝備給（investissement）であり、特異点であり、存在における凹みであり、存在論的レリーフであり、不変項であり、横断的なものである。((中略)) それは別の次元の現実のポジティヴな原理ではなく、諸偏差がそのまわりに配置されるような水準なのだ（NA, 302）

６）否定的なモノ、それは「二重化されたもの」である。

[i] *Signes*, Paris, Gallimard, 1960, p. 228（『シーニュ２』木田元訳、みすず書房、一九七〇年、三七–三八頁）。以下 S と略し、原文頁数と邦訳の巻数および頁数を記す。

[ii] *Ibid.*, p. 270.

[iii] *Ibid.*, p. 288.

[iv] 「受動性は実在論におけるように、けっして正面的なものでは[なく]、つねに側面的なものである。すなわち主体は、ある種の創設（Stiftung）、ある種のパースペクティヴを継続するものとして、みずからを認めるのである」（IP, 181）。

[v]「体内化としての身体図式。（中略）（とりわけ視覚による）感覚性は、志向的に体内化を含む。すなわち、「開口部」を通した外部への移行としての身体の機能を含むのである」（*La Nature. op. cit.*, p. 346.）。